

市史講座第 7 回ミニレポート

10 月 18 日(土)第 7 回の講座が開かれました。

第一部「松江藩の財政について」(講師:佐賀大学地域学歴史文化研究センター准教授 伊藤昭弘先生)



伊藤先生には松江藩の財政について、これまであまり論じられなかった視点からご説明をいただきました。

松江藩の 74 年間にわたる収支の帳簿「出入捷覧」には、一般会計にあたる「所務」と、臨時支出にあてられる「御蔵」が記載されています。この「御蔵」の財源が松江藩の借金の問題とかかわってきます。

諸藩では大坂に特定の「館入(たちいれ)」銀主を置き、資金の借入や江戸への送金を任せていたそうですが、松江藩の場合は宝暦期(1751~1763)頃までに鴻池栄三郎など 4 人の大坂銀主による「複数蔵元制」が完成していたそうです。鴻池家の関係は

貞享期(1684~1688)からあり、鴻池家にも松江藩関係の帳簿が残っています。大坂商人からの借入について朝日丹波は、「借金なしでもやっていけるが、江戸で急な支出があった場合などの資金調達に困らないため」と言っています。逆に、鴻池家が火事にあつた際には松江藩が貸付を行うなど、相互に依存する関係を保っていたようです。借り入れた資金は支藩への融資、地域産業や家臣への融資にあてられ、領内経済の発展に貢献していたのではないかとされました。まとめとして「出入捷覧」の記載について、「御蔵」が臨時支出を担当することにより、「所務」の収支が安定していたと分析されました。

第二部：「伝染病の大流行と信仰」(講師:鳥取短期大学講師 喜多村理子 先生)

昔から有効な特效薬がない伝染病は、庶民にとって大変な不安と恐怖を与える事象でした。かつて、明治初期に国外から入って来たコレラは日本中に蔓延し、人々を震撼させ、その被害は甚大なものでした。

今回の講座で、喜多村先生は伝染病の流行に対して庶民が神仏への帰依で救われようとし、その被害から逃れようとした事を、史料と、かつて行われた祭礼の取材や、関係者への聞き取り調査などからまとめられ、講演されました。

初め、明治12・15・19年と立て続いて日本中に蔓延したコレラに対して行政が行った布告や政策、コレラをはじめとする赤痢・腸チフスなどの流行病の被害状況について統計数値を示し解説されました。

そしてコレラの大流行によって、岡山県高梁市に所在する木野山神社が信仰され始めました。大山祇尊・豊玉彦命・大己貴命を祭神とするこの神社が、眷属神として狼神を祀っていたことから、コレラ除きの神社として信仰が広がったのです。山陰・山陽・四国各地で講社結社が始まりました。

コレラは明治期の史料では「コロリ」と書かれています。コロリの漢字の当て字は「虎狼刺」と書きました。この字から狼が虎を刺すと読まれ、虎より強い狼神への信仰になったとのことだそうです。木野山神社から勧請するため地域の代表者が木野山神社へ参り講社誓約をし、御神号掛字・木札・御守を受けられ、それを在所へ持ち帰って神祠へ祀りました。人々は流行病封じの祈りをこの狼神に祈り、祭礼を行ったのです。

山陰各地で明治12年から15年間に255講があり、松江市内では34講あったそうです。現在ではほとんどの所で祀りは行われなくなっています。



次に、流行病ではありませんが、人生50年とされた時代、長寿を願い、又は新生児・子供の元気な成長を祈って信仰されたのが延命地藏尊でした。先生は雲南市大東町畑鶴の地に祀られる延命地藏尊について話されました。この地藏尊は昭和40年代まで玉湯町・八雲村の各地を回り、回った地では地藏祭りが行われました。地藏尊の前で地元住民が数珠巡りをし、念仏を唱え祈願しました。この地藏は人に背負われて村々を巡ったとのこと。これら祭祠のほとんどは現在行われなくなったようですが、現在も継承されている土地があれば編集部までお知らせください。